

## 事例紹介② 美術作品 圓鰐勝三立体作品

羽生佳代／貝塚建

本稿では川崎市市民ミュージアム所蔵、圓鰐勝三立体作品三点の修復事例を紹介する(図1、2、3)。

作品はそれぞれ木、石膏、ブロンズと異なる材料で創作されている。被災後の状態としては、泥や砂、繊維などの異物が付着し、染みが生じていた。一部に欠損や彩色の浮き上がりなどの症状も見受けられた。以下に詳細を記す。

《誕生佛》は部分的に彩色が施された木造彫刻である。表面全体に砂や繊維が付着し、黒



図1 | 圓鰐勝三《誕生佛》、680×240×220mm、木に彩色・木彫、1980年



図2 | 圓鰐勝三《うさぎ》、石膏に彩色、制作年不明



図3 | 圓鰐勝三《わらび》、ブロンズ、石・鑄造、1976年

色のしみが点在していた。仏像でいうところの光背にあたる樹木の表現の一部に欠損が認められた(図4)。

《うさぎ》は全面彩色が施された石膏彫刻である。表面の金属色の彩色層は薄れ、おそらく下地であろう茶褐色の彩色層が露出していた。全体に砂が付着し、特に凹部に汚れが集まっていた。一方のうさぎの左耳に黒色の汚れが付着し、右耳の表面彩色には亀裂と浮き上がりが生じていた(図5)。

《わらび》はブロンズ製の鑄造彫刻である。作品下部や凹部、台座に砂が付着していた。また部分的に緑色の塗料が付着していた(図6)。

三点ともに乾燥と燻蒸が行われたが、汚れやカビによる劣化の進行、金属には錆の発生も懸念された。作品の安定性・保存性をより高めるため、本格修復において可能な限り付着異物やカビの胞子などを除去し、浮き上がった彩色層を再接着・補強するものとした。

修復の方針としては、まず材料は文化財修復に適し、安全性が証明された材料を使用すること、次に仕様については欠損部分の補作は行わないこと、再塗装は行わないこと等が定められた。

作業は次のような工程で進められた。修復前写真撮影と作品の損傷状態の調査を行った後、ブロー、刷毛、ケミカルスポンジを使用し、全体をクリーニング(図7)。その後精製水と脱脂綿を用いて付着物を除去した。《誕生佛》の黒い染みは沈着しており、完全に除去することは困難であった。木を傷めることのないよう、軽減させるまでにとどめた。《わらび》は石の台座と本体を解体して作業を進めた(図8)。緑色塗料の上層に付着していた砂は

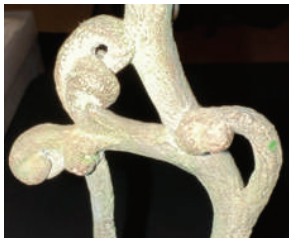


図6 | 砂・塗料の付着

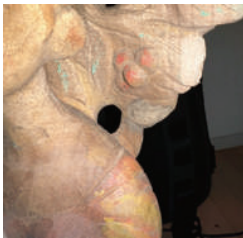


図5 | 塗膜の剥離

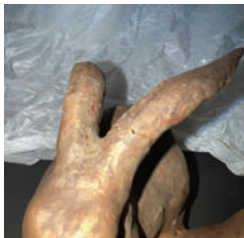


図4 | 欠損部